

氏名(本籍)	舟久保 大輔 (北海道)		
学位の種類	博士 (歴史学)		
学位記番号	博歴甲第31号		
学位授与の日付	令和4年3月20日		
学位授与の要件	学位規程第5条第1項該当		
学位論文題目	古代王権の神話と思想		
論文審査員	主査	駒澤大学教授	博士 (文学) 瀧音 能之
	副査	駒澤大学教授	博士 (日本史学) 中野 達哉
	副査	駒澤大学教授	林 譲
	副査	駒澤大学講師	博士 (歴史学) 佐藤 雄一

論文内容の要旨

『古事記』・『日本書紀』(以下、『記』・『紀』とする)には数多くの神々が登場し、読者をひきつける魅力的な物語、神話が語られている。しかし、その神話は古代の日本列島にいた多くの人々の実際の生活、道徳規範、あるいはその共同体の秩序と密接にかかわるような民間の中で伝承されてきた神話とは一線を画している。『記』・『紀』の神話は天皇の支配の正統性、さらには天皇を中心とする王権の起源、正統性を保証する王権神話として捉える必要がある。本論文では、『記』・『紀』の神話をそのような視点で捉え、その王権神話がどのように成立したのか、どのような意義を持ったのか、について考察したものである。

特に、『記』・『紀』において、王権の起源を語り、天皇の始祖神話である、いわば王権神話としてのハイライトシーンであるという観点から天孫降臨神話を素材とした。

第一部では「古代王権の神話」として、天孫降臨神話がどのような歴史的背景・過程で成立したのか、また王権にとってどのような意味を持ったのかを論じた。

具体的には、まず天孫降臨神話について、①王権の起源として天という世界(いわゆる高天原)が設定されている。②天の支配者である最高神(タカミムスヒ尊・アマテラス大神)と皇孫(ホノニギ尊)・天皇が系譜上(血統上)繋がっている。③皇孫が最高神の命を受けて地上世界の統治者として降臨する、この三点を核であると捉え、これが欽明期の世襲王権の成立を背景に形成されるとした。

ところで、天孫降臨神話は『記』・『紀』に合計六伝承が収載されているが、それらの子細を見いくと、多くの違いがあることに気が付く。特に皇孫に降臨を命じる神がタカミムスヒ尊一神だけであったり、アマテラス大神一神であったり、二神並立であったりという違いが重要であろう。これについては、司令神がタカミムスヒ尊からアマテラス大神へある時期に変更されたと考えられる。

問題は、なぜタカミムスヒ尊が司令神として位置づけられたのか、また司令神がタカミムスヒ尊か

らアマテラス大神へ変化したのかである。前者について、タカミムスヒ尊は稲の生育に関わる神、特に穀霊に対して「ムスヒ」の神の靈威を付与する神、祭儀との関係では新嘗祭と関わる神として位置付けられるとした。また、そのような神が司令神とされたのは古代日本には農本主義があり、天皇はそれを支える存在であったこと、またそれが可能であったのは天皇自身が穀霊として観想されており、そのような思想を補完する役割がタカミムスヒ尊に求められたからである。

後者については持統天皇の皇位継承を正統化するという説が通説であるが、本論文では通説にはタカミムスヒ尊・アマテラス大神からホノニギ尊までの系譜と持統天皇から文武天皇までの系譜には齟齬があるという問題があること、むしろ天武朝における中央集権化政策との関わりの中で司令神の転換が行われたことを論じた。

次に天孫降臨神話の降臨神についても『記』・『紀』の所伝ごとの違いも重要である。つまり、アマテラス大神を司令神とする天孫降臨神話では、降臨神がオシホミミ尊からホノニギ尊に変更されることの意味についてである。これについても、持統天皇の皇位継承や聖武天皇の即位を正統化するというのが通説である。しかし、本論文ではこの通説に対する疑問を提示し、むしろタカミムスヒ尊・タカミムスヒ尊から神武天皇までの系譜と皇親の律令規程との関わりがあることを指摘した。

では、このような神話が王権にとってどのような意味があったのか。これについては、『風土記』に見える国譲り神話・天孫降臨神話を素材にして、『記』・『紀』の天孫降臨神話という王権神話が地域社会にどのように受容されたのかという視点から論じた。『風土記』を見ると、両神話はいくつか記載があり、在地で王権神話が受容されていることがわかる。しかし、その受容のあり方についてはいくつかの特徴が見出せる。まず、在地で王権神話を受容する際は、在地の論理に基づき、一定程度の改変が可能であった。しかし、それは無条件にできるものではなく、王権に対する奉仕を強調するということが前提であった。また、王権神話の受容に際してもその神話の核心部分は一切変えることはできなかったと思われる。つまり、王権にとっては前述した天孫降臨神話の核の部分こそないがしろにすることができない最重要要素だったのであり、それを否定しない限り、自由な改変が許されたのである。

第二部では「古代王権の思想」として、『記』・『紀』に見られる王権に関わる思想を取り上げ、その成立や意義を考察した。

まず、「日の御子」思想について、この思想の意味と成立過程を考察した。「日の御子」は太陽のように偉大な御子という解釈と、太陽神の子孫という解釈があるが、私見としては後者が妥当であると判断した。特に、天武朝に皇祖神がタカミムスヒ尊からアマテラス大神という太陽神に転換したことと関連させて「日の御子」思想の成立を天武朝であると考えた。また、「日の御子」思想の修飾句である「誉田」・「高光る」・「高照らす」の三者の意義についても考察し、「誉田」は『記』・『紀』内部の論理として応神天皇を顕彰する目的があること、「高光る」は王権の太陽信仰そのものに関わる思想であること、「高照らす」は天武天皇の顕彰に関わるということを論じた。

次に天孫降臨神話の降臨地について、「日向」・「高千穂」に着目して、なぜ「日向」の「高千穂」なのかという問題について考察した。結果としては、太陽信仰と古代王権の他界観との関係が深いこと

を指摘した。

次に伊勢神宮の成立について、なぜアマテラス大神は伊勢に鎮座することとなったのか、また『記』・『紀』の伊勢神宮成立の伝承成立の背景について論じた。アマテラス大神が伊勢に鎮座するのは、太陽信仰もあるが、それ以上に伊勢が常世という他界との結節地域であることが重要であること、つまり古代王権の他界観との関係を重視すべきであることを指摘した。

最後に「天皇霊」・「皇祖之霊」について、「天皇霊」は外来魂とは考えられず、天孫降臨神話のマドコオブスマとの関係、大嘗祭との関係を見出すことはできないこと、むしろ「天皇霊」は天皇に内在するものであり、戦争などと関わりが深いと言えようと考えた。また、タカミムスヒ尊やアマテラス大神ら皇祖神らの霊威を意味する「皇祖之霊」と「天皇霊」は区別すべきであり、前者は天皇自身に内在するものであるため、これを被ることはできず、逆に「皇祖之霊」は祖先神らの霊威なので天皇だけが被ることのできる思想であったとした。

以上を踏まえ本論文では、『記』・『紀』に見える王権神話・あるいは思想の成立や意義について次のようなことを指摘できると考える。

まず、王権の神話としては天孫降臨神話こそ最も重要な神話である。これらは所伝によって相違が見られるが、むしろ共通する部分こそ王権神話の核であり、王権にとって最も重要な部分であった。これら王権神話は在地社会の中で、あるいは各氏族らによって受容されることがあり、一部改変されることもあったが、この核については決して変更することはできなかった。天孫降臨神話は所伝で相違も見られるが、その相違する伝承が創られる時にはこの核が常に意識されており、これをないがしろにはできなかったのである。言い換えると、相違する伝承、異伝はこの核を文字通り中心にしてそこに様々な要素を加えながら、形成されていったと思われる。

次に、天皇・王権を支えるイデオロギーについてである。これまで論じてきた神話・思想は天皇・王権の正統性を確保する、いわばイデオロギーでもある。それについては、時期によって、王権のあり方の変化に対応して創り変えられていくということが重要であろう。具体的には、六世紀、世襲王権の導入した欽明朝を画期に天孫降臨神話が成立し、タカミムスヒ尊が皇祖神となったが、天武朝にアマテラス大神へ変更された。これは天武天皇の王権の問題、中央集権化が求められる中で変更されたのであった。一般に、天武・持統朝と呼ばれ、両方の時代は画期とされるが、天孫降臨神話については天武朝を重視すべきであろう。また、天孫降臨神話の降臨神の変更や「日の御子」思想の成立・伊勢へのアマテラス大神鎮座も天武朝が画期であることを考えると、王権神話や思想の成立そのものについても天武朝を強調すべきであると考えられる。

最後に、王権を支える思想としては他界観も重要であると思われる。高天原という天上世界は言わずもがなであるが、地上世界と結節する黄泉国・根国・常世国・海神の国などは天皇の霊威更新や正統性を担保する極めて重要な世界として王権神話内に位置付けられていたのである。

論文審査結果の要旨

I 研究課題と構成

このたび、舟久保大輔氏が提出した学位請求論文「古代王権の神話と思想」は、本文 287 頁（1 頁 = 55 字×20 行、400 字詰め換算で 790 枚）におよぶ。

本論文は、『古事記』『日本書紀』の神話を古代王権の起源や正統性を語る王権神話であると捉え、そのような王権神話がどのような歴史的過程を経て成立したか、またどのような意義を持ったかという問題について考察したものである。

本論文の構成（目次）は、以下の通りである。

序 論

第一節 緒言

第二節 古代王権論の研究史

第三節 先行研究の整理

(1) 『古事記』・『日本書紀』の史料的特質—成立論を中心に—

(2) これまでの神話研究

第四節 本論文の課題と視座

第一部 古代王権の神話の成立と意義

第一章 天孫降臨神話の成立

はじめに

第一節 『古事記』・『日本書紀』の天孫降臨神話の所伝における相違点と共通点

第二節 天孫降臨神話成立の時期と歴史的背景—古代王権の展開に着目して—

(1) 推古朝の遣隋使について—成立時期の下限—

(2) 五世紀までの王権

(3) 六世紀以降の王権

第三節 天孫降臨神話の思想的背景

(1) 天命思想との関係

(2) 高句麗始祖神話の導入

おわりに

第二章 古代王権におけるタカミムスヒ尊の位置づけ

はじめに

第一節 王権最高神（皇祖神）としてのタカミムスヒ尊

(1) 『日本書紀』顕宗天皇三年二月条・四月条文とタカミムスヒ尊

(2) 推古朝の遣隋使記事について

第二節 タカミムスヒ尊の特徴

- (1) ムスヒの神について
- (2) 新嘗の神としてのタカミムスヒ尊

第三節 皇祖神タカミムスヒ尊成立の背景

- (1) 古代日本の農本主義
 - (2) 皇祖神タカミムスヒ尊と屯田の成立伝承
- おわりに

第三章 天孫降臨神話の司令神の変更について

はじめに

第一節 司令神変更の時期

- (1) 持統天皇から文武天皇への皇位継承
- (2) 天武朝における変更

第二節 司令神（皇祖神）タカミムスヒ尊の後退

- (1) タカミムスヒ尊の特徴
- (2) 天武朝における神祇祭祀制度
- (3) 律令国家成立期の外交上の問題
- (4) 天皇の神格化

第三節 司令神（皇祖神）アマテラス大神の成立

- (1) アマテラス大神の性格
- (2) 「天照大御神」の名義

おわりに

第四章 天孫降臨神話の降臨神について

はじめに

第一節 先行研究の整理

- (1) 嬰兒信仰との関係について
- (2) 持統天皇の譲位とその正統性
- (3) 聖武天皇即位の正統性
- (4) タカミムスヒ尊系神話とアマテラス大神系神話の統合

第二節 アマテラス大神から神武天皇までの系譜とその意味

第三節 降臨神の変更と皇親

おわりに

補論 国引き神話の特性とヤツカミズオミズヌ命

— 『古事記』・『日本書紀』と『出雲国風土記』の比較を通して —

はじめに

第一節 国引き話の概要

第二節 国生み神話の概要

第三節 水平的構造と垂直的構造の背景

第四節 ヤツカミズオミヅヌ命の性格

第五節 スサノオ尊とヤツカミズオミヅヌ命

おわりに

第五章 『風土記』における国譲り・天孫降臨神話について

はじめに

第一節 『古事記』・『日本書紀』の国譲り・天孫降臨神話

第二節 『風土記』の編纂と神話・伝承

第三節 『風土記』に見える国譲り・天孫降臨神

(1) 『常陸国風土記』の場合

(2) 『出雲国風土記』の場合

(3) 『山城国風土記』逸文の場合

(4) 『日向国風土記』逸文の場合

おわりに

第二部 古代王権の思想

第一章 「日の御子」思想の成立と意義

はじめに

第一節 「日の御子」思想と日神

第二節 「日の御子」思想の成立時期

第三節 「日の御子」思想の用例(一) — 『古事記』 —

第四節 「日の御子」思想の用例(二) — 『万葉集』 —

第五節 「誉田の 日の御子 大雀」について

第六節 「高光る」と「高照らす」について

おわりに

第二章 天孫降臨神話の「日向」と「高千穂」

— 『古事記』・『日本書紀』に見る他界観に着目して —

はじめに

第一節 天孫降臨神話の降臨地に関する諸伝の検討

第二節 「日向」の意味と太陽信仰

第三節 王権神話における他界観

第四節 他界との結節地域と神の天降り

第五節 山と海の靈威と皇孫の降臨地

おわりに

第三章 伊勢神宮の創祀とその伝承について

はじめに

第一節 『日本書紀』に見えるアマテラス大神の伊勢鎮座伝承の虚構性

第二節 伊勢鎮座の理由

第三節 伊勢神宮創祀伝承の成立背景—『古事記』・『日本書紀』の成立伝承—

(1) 『日本書紀』伊勢神宮創祀伝承の成立背景

(2) 『古事記』における伊勢神宮創祀伝承

おわりに

第四章 「天皇霊」と「皇祖之霊」

はじめに

第一節 折口信夫の「天皇霊」説

第二節 折口説への批判

第三節 「天皇霊」に関する用例

(1) 『日本書紀』の場合

(2) 『続日本紀』の場合

第四節 「天皇霊」の意義

第五節 「皇祖之霊」の意義

おわりに

結 論

II 論文の内容と評価

舟久保氏の論文に見られる論点は多岐にわたっているが、そのなかでもとりわけ、天孫降臨神話をめぐる諸問題は多くの示唆に富んでおり、本論文の一番の価値は、そこにあるといってもよいであろう。

まず、第1部の第2章「タケミムスヒ尊の位置づけ」では、タカミムスヒ尊の性格を論じている。ここでは天孫降臨神話において、ニニギに天降りを命じる神、すなわち、司令神についての論及がなされている。『記』『紀』には、合わせて6つの天孫降臨神話が見られるが、司令神に注目するならば一様ではない。すなわち、タカミムスヒ尊であったりアマテラス大神であったり、2神がともに登場したりする。こうしたことが天孫降臨神話にどのような影響を与えるのかということから舟久保氏は、タカミムスヒ尊の性格を分析している。この結果、舟久保氏は、タカミムスヒ尊を稲の生育に関わる神であると規定し、この神が司令神とされたのは古代の日本が農業を基本とする国であったからとしている。

『記』『紀』にみられる神話のなかで最も重要と考えられる天孫降臨神話において、タカミムスヒ尊が司令神とされた理由は、何よりも稲と関係するためであり、6つの天孫降臨神話のなかでも本来的

には、タカミムスヒ尊が司令神の役割を担っていたと結論づけている。したがって、6つの天孫降臨神話について見るならば、タカミムスヒ尊が司令神のものが最も古くに成立したものであり、アマテラス大神が単独で司令神とされているものが最も新しいとみなしている。

つまり、司令神の観点からいうと、タカミムスヒ尊からアマテラス大神へと変容しているということになる。こうしたことについて論じたものが、第1部の第3章「天孫降臨神話の司令神の変更について」である。この変更という点に関しては、すでに多くの研究の成果があり、通説ともいべき結論が出されている。それによると、タカミムスヒ尊からアマテラス大神へと司令神が変化した時期は持統天皇の時代とされている。この変化の理由としては、当時の政治状況が指摘されている。すなわち、天武天皇のあとをついだ持統天皇は、天武天皇との間の子である草壁皇子を次期天皇に立てようとした。しかし、草壁皇子は早世したため、草壁皇子の子、つまり持統天皇の孫に皇位を譲ろうとした。この孫が他ならぬ文武天皇である。

こうした祖母から孫への皇位継承を神話的に保障しようとしたのが、アマテラス大神が司令神となって孫のニニギ尊を降臨させるタイプの天孫降臨神話に他ならないとする。また、持統天皇が司令神になったことについては、天武天皇のあとの皇位継承を正当化するためであるとされている。これらが通説的な理解であり、説得力もそれなりにあると考えられる。

これに対して舟久保氏は、持統から文武へという祖母から孫への継承は、この部分のみを見ると確かにそのようになるが、系譜をもう少し視野を広げて見ると、神話にみえる系譜と持統朝のそれとでは必ずしも重ならない点が多く見られ、持統天皇が孫に皇位を譲るための保障として天孫降臨神話に手を加えたということはできないとした。さらに、持統天皇が司令神になった理由についても、天武朝における中央集権化政策との関わりの中でなされたと論じ、司令神の変換が行なわれた時期を持統期ではなく天武期であると論じている。

これらの舟久保氏の指摘は、従来の通説に対して再吟味を迫るものであり、高く評価されて良いであろう。

次いで、舟久保氏は、天孫降臨神話の場所についても論じている。この点については、国譲り神話の舞台が出雲であるのに対して、その結果、ニニギ尊が天降るのは九州の日向となっているのは、どのような理由によるものかという素朴な疑問に答えるものである。この疑問に関しては、古くからさまざまながいわれているものの、いまだに通説といえるべき見解はないといってよいであろう。

舟久保氏は、天孫降臨神話の場所である日向の高千穂峰に注目して、高千穂とは固有名詞としてとらえるよりも稲穂がたくさん積もった場所という意味にとらえている。その上で、天孫降臨神話を穀霊信仰に基づく神話であるから稲穂の積もった山である高千穂に天降るとしている。そして、山に降るのは、ニニギ尊の子孫となる天皇にとって山と海の支配が欠かすことのできない重要なポイントであったからとされている。

天皇にとって、山・海がいかに重要であったかについては、『記』『紀』の天孫降臨神話から神武天皇の誕生までを見ると明らかであると舟久保氏は指摘している。すなわち、ニニギ尊は天降ってのち山の神と結ばれ、ホオリ以下の3神を生む。次いでホオリが海の神の娘と結婚してウガヤフキアエズ

を生む。そして、ウガヤフキアエズが叔母と結婚して神武天皇が生まれることになる。つまり、ニニギ尊および、その子孫は山の神の娘や海の神の娘を妻としているのである。これはとりもなおさず、山の神や海の神の霊威をニニギ尊以下の皇室の祖先がとりこんでいるということに他ならない。このことは言葉を変えると、天皇は国土を支配するのみではなく、山や海をも統治できなければならないということをもものがたっている。

ニニギ尊が高千穂峰に天降る理由は、こうしたことによるものであると舟久保氏はのべている。さらに、なぜ日向に天降るのかという点については、ひとつは地名から太陽神信仰からの影響としている。こうした考えは以前からあるもので、舟久保氏もそのことを肯定的にとらえているわけであるが、さらに、舟久保氏は日向が天孫降臨神話の場に選ばれたのはそれのみではないとしている。舟久保氏は、常世国・黄泉国・海原といった他界を検討した結果、こうした他界にはそれぞれ皇統につながる神が主宰神として配されていることに注目している。

これらの他界には皇統に連なる神が配されており、このことによって天皇が支配すべき国土（葦原中国）の秩序形成に寄与させるという意味があるというのが舟久保氏の主張である。したがって、海や山の支配が天皇としては不可欠であり、ニニギ尊が日向に天降るのもこうしたことによるとしている。

以上、舟久保論文の最大の成果と考えられる天孫降臨神話の諸問題の解明および、論文の斬新さについてのべてきたが、本論文にはこれのみではなく、伊勢神宮の創始や天皇霊・皇祖之霊といった問題に関しても論究が見られ、質の高い論文となっている。

もとより、舟久保論文に関して問題点がないわけではない。それは大きくいうと論文の構成についての問題である。たとえば、第1部から第2部への展開について見るならば、いささかスムーズさに欠ける点がみられる。さらに、1部の第4章のあとに置かれた補論に関していうと、5章のあとに配置した方が、説得力がより増したのではないだろうか。これらのことを考慮すると第1部と第2部とをあえて分ける必然性があったかという点も気になるところである。

しかしながら、これらの問題点は本論文の価値を落とすものではなく、内容的に十分な質を確保していると考えられ、加えて、外国語試験および学識認定の結果もふまえ、舟久保大輔氏の博士学位請求論文は博士学位にふさわしいものと審査員一同判断するに至った次第である。

主査 瀧音 能之
副査 林 讓
中野 達哉
佐藤 雄一